村松・林研究室

[東アジア近現代の建築遺産：なぜ、いかに評価するか?]

生産技術研究所　人間・社会系部門
Department of Human and Social Systems

都市遺産／資産開発学；都市居住空間史

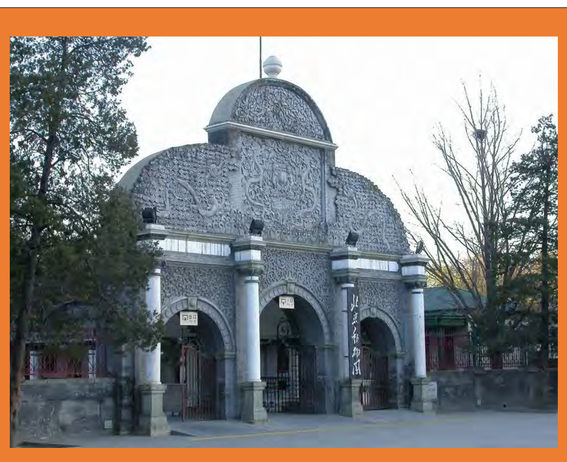
建築学専攻　　http://www.shinlab.iis.u-tokyo.ac.jp

1. 従来の建築遺産の見方

遠い過去の建築遺産は、自然に淘汰され、残存するものは多くない。つまり、稀少性によってその価値は決まってくる。どんなものが重要であるかを問う以前に、存在そのものが価値なのである。そして、往々にしてそれがナショナリズムに接続され、国家や民族の威信のために保全されることになる。日本の古社寺保存法（1897）など国民国家の遺産保存はいうまでもなく、ユネスコ世界遺産は世界遺産と銘打っているものの、大方が国民国家、民族の「優秀性」を競うものに変質してしまっている。

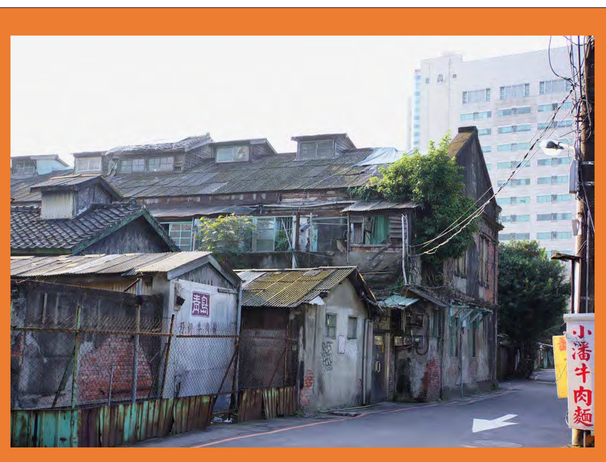
2. 近現代建築を評価する難しさ

しかし、近現代の建築の評価は、かならずしも簡単ではない。その理由に、４点が挙げられる。1.同種のものがたくさんあり、稀少性では評価できない。2.国外のものとの混淆がおこっており、国民国家、民族を発揚する至宝といえない。3.欧米建築の下手な模倣にすぎないから、心に刺さらない。4.われわれの周囲に存在し、実際に使われているため、遺産ではなく、資産や環境としての意味が重要視されてきた、など、評価を複雑にする要因が多々生まれてくる。



農事実験場（1906/北京）：西洋の様式を取り入れた清政府の施設、既存の近現代建築史において位置付けが曖昧。
図版：https://zh.wikipedia.org/

工業伝習所（1907/ソウル）：大韓帝国時期に日本人建築家によって建てられ、今は「歴史の積弊」として排除される動きが強い。
図版：https://japanese.visitseoul.net/



台湾機器局第五倉庫（1880年代/台北）今ではありふれた工場施設で、雑居区に埋没している。
図版：https://mapio.net/

森文旭館（1926/愛媛県内子町）：なかなか遺産に認定されるまで、町の施設としてのみ見なされていた。
図版：http://nakanakaisan.org/

このような東アジア近現代建築は
いかに遺産として見直せるか？

3. 近現代建築遺産から東アジアを語る

こういった評価の混乱や難題を解決するためには、どこか（たとえば、欧米の近代）で確立された既存の価値観を脱して、独自の価値観を紡ぎだす必要がある。そして、それは、地球全体という大きな空間と人類史の長い歴史への位置づけによって、初めて可能になるものである。村松・林研究室の展示は、こういった複雑な要素を含む、非西洋近現代建築の事例のひとつとして、東アジア（中国、 日本、朝鮮半島、台湾など）のここ200年ほどの建築を評価する価値観を提示することを目標とする。